九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

竹岡勝也の肖像（中）

山口，輝臣
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門日本史学 ： 助教授 ： 日本近代史

https://doi.org/10.15017/3526

出版情報：史淵. 144, pp.1-24, 2007-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

竹岡勝也の肖像（中）

山口輝臣

一　福岡・太宰府・札幌・仙台・東京　後半生
二　山寺　少年時代（以上、前号）
三　山形　中学時代
四　仙台　高校時代（以上、本号）
五　東京　大学時代
附　竹岡勝也年譜および著作年表

【あらすじ】草創期の本誌に十余編の論文を寄せた日本文化史家・竹岡勝也（一八九三～一九五八）の評伝。（上）では、まず学者としての後半生を概観したのち、カトリックの濃厚な雰囲気のなかでの生誕から、小学校を卒業し、郷里の山形県山寺を出るまで記述を進めた。

三　山形　中学時代

明治四〇年（一九〇七年）四月、勝也は山形県立山形中学校に入学する。兄達が中学校へ進学していたことと勝也の小学校での成績を考慮すれば、問題は進学するかどうかではなく、どこへ進学するかであったろう。

この時点で県内には中学が四校あった。山形・米沢・庄内・新庄である。[87] 四〇年度における上記の四校の学生数は合計で二〇七五人。そのうち勝也と同じ飽海郡の者は一四三人。内訳は、鶴岡にある庄内中学校が一一〇人と大部分を占め、次いで新庄中学校が二三人、山形中学校が一一人、米沢中学校は一人。また勝也と同じ年に飽海郡から山形中学校を志願したのは僅かに二名。明らかに少数派だった。[88] さらに阿部家と山形中学校の関係というと思い起こされるのは、次郎兄が放校となった一件である。次郎はまず庄内中学校に入学し、次いで山形中学校に転じたが、そこで加藤忠治校長を排斥するためにストライキを企てたとして放校処分を受けたのである。[89] それにもかかわらず、勝也もすぐ上の兄たちと同じく、山形中学校を選んだ。

同校は明治一七年に開校した県内最初の中学校で、「中学といえば本校を指すという伝統と誇り」があり、記章もただ「中学」としていた。[90] 進学先の選定にあたっては、山形中学校のこうした面とともに、両親が山形市内に住んでいたことが強く影響していよう。両親にとってみれば、経済的な負担を減らすことを考えたであろうし、[91] 一方、勝也からすれば、「雲外の世界に住む女神」であった母との生活という夢を叶えてくれるものでもあった。もっとも夢はやすやすと叶ったわけではない。入学試験は不合格だったと勘違いした勝也は、東京に逃げるような動きを示したらしい。目指したのは次郎兄のところだろうか。結局、中位の成績で入学できていたのだが。[92]

山寺から出てきたばかりの十五歳の勝也にとって、山形は眩いばかりの大都会であり、なにかと圧倒されるこ

とも多かった。またかれの在学中には、それこそ校史に残る大事件がいくつか起きている。明治四一年九月の皇太子行啓。四二年度から学級名に忠・孝・仁・義などの徳目を付すなどした板垣政一校長――弟に征四郎（陸軍大将）や政参（九州帝国大学教授・医学）がいる――による校風改革。そして四四年五月八日、山形大火による校舎の焼失などである。[93] しかし勝也は、自らの中学時代を語った文章中でそれらに触れることはない。勝也以外の在学生による回顧[94]と比べるとその差は際立つ。校史を彩る大事件もかれの関心を心底惹くことはなく、学校生活は勝也にとって決して心地よいものではなかった。

この頃の学校の生活は怠屈であつた。先生の顔も平俗に堕して、そこには何等感激の影も見られない。学校は若き生命を育てゝ呉れる処ではなくして、却つて伸びんとする生命の火に水を灌ぐ処のやうに思はれて来た。[95]

それを救ったのが家族との生活であった。父・富太郎は明治四三年に視学官を辞め、皇太子行啓を記念して設けられた感化院・山形県立養徳園の園長に就任した。[96] 山形という都市における両親と子供とからなる家庭は、勝也がこれまで経験したことのない新鮮なものであり、女神とまで仰いだ母は、それに相応しく、養徳園の子供たちに慕われ、遊びに来る子供たちで家は賑わった。ここ山形での家族体験は、勝也の記憶に生涯刻まれていくことになる。[97]

＊

山形中学校へ進んだ勝也は、当初、いずれかといえば自然系への興味を増したようだ。小遣いを貯めて購入した本も、ダーウィン著・田中茂穂訳『人類の由来』[98]であったし、植物学、とりわけ細菌学をやろうかと、すぐ上の兄・余四男に相談したこともあった。[99] しかし他方で入学して間もなく、生徒会にあたる共同会の機関誌『共同会雑誌』に「春の夢」という小文を投じている。[100]「僕は今、詩集に読みあいて横になり、庭を眺めながら、現とも

なく夢路を辿る」。このようにはじまり、「ふいと目がさめた」で終わる二百字強の詩のような作品である。

同じ中学の四年生であった余四男兄は同誌へしばしば文章を載せ、「文壇の勇将」などと呼ばれていた。[101] 同じ雑誌への投稿であり、この兄との関係を見逃すわけにはいくまい。しかし創作とはいえ、「詩集によみあいて」とある点がひときわ興味を惹く。後年になっても「この頃程詩人といふ言葉の魅力を感じた事はない」と振り返る。[102] 詩への嗜好。これは拡大し、昂進して次のような逸話を生む。勝也は、

小説を耽読して倦まず。家尊之を憂い給ひ、数学教官佐久間氏に訓戒を依嘱せらる。氏は日常此の文学少年を愛し、プラトン全集・論語等を読みては教壇に哲学の気焔を揚ぐるの好先生なり。「何んな本を読むのか持つて来い。」「余り沢山あるので持つて来られません。[103]」

かように勝也がこの時期、もっとも興味を注いだのは詩や小説などの文学作品を読むことだった。

テニソン・バイロン・ミルトンといった詩人たち。漱石・鷗外から藤村・荷風・潤一郎・草平・三重吉といった同時代の日本人作家。さらにはゲーテ・シラーをはじめとしたドイツ文学。そして雑誌ならば『白樺』『スバル』『ホトトギス』[104]。文字通り濫読だった。

しかし勝也が通っていた中学校において、こうした行為は必ずしも好ましいものとされてはいなかった。佐久間先生[105]からの訓戒は「本を読むなら、濫読をやめて聖人の本を読め」というものだったし、[106] そもそも同校では、生徒に過剰な金銭を与えると「猥りに雑誌小説の類を購読」するようになると、校長自ら保護者を戒めている。[107] 勝也の嗜好は、褒められるどころか、むしろ疚しいことと見なされていた。教師が無条件に読書をすすめることなどなかったのである。

確かに勝也は、次郎兄とは違い、ストライキを首謀するといったことはまったくなかった。しかし自らとっての最大の関心事が否認されていた勝也にとって、中学校が窮屈に感じられたであろうことは間違いない。「伸びん

とする生命の火に水を灌ぐ処」という像は、こうした点と深く絡んでつくられていったのだろう。

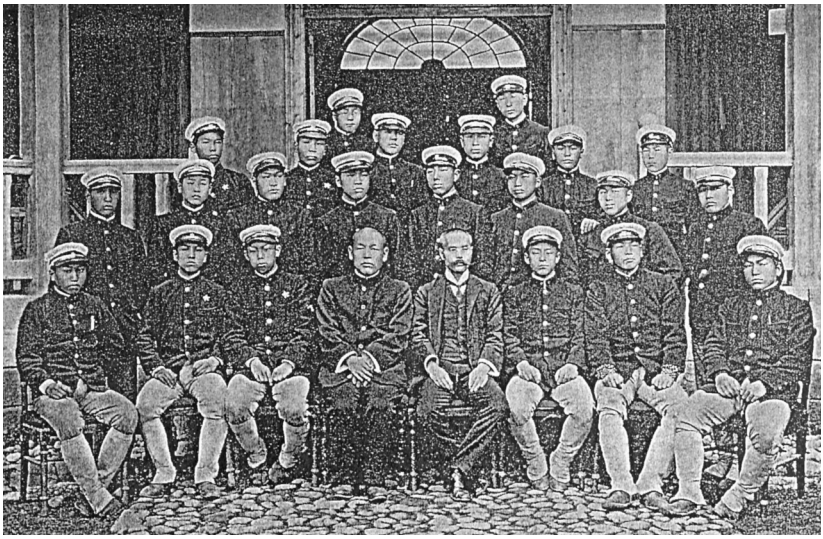
＊

ところで濫読の対象となった本や雑誌を、勝也はどのようにして入手したのだろうか。勝也が最新の出版物を次々と手にすることができた背後には、次郎兄の尽力があった。

勝也が中学校へ入学した明治四〇年、次郎は東京帝国大学の哲学科を卒業。『帝国文学』の編集委員を辞任する一方で、『新思潮』『明星』などへ執筆。四二年から夏目漱石のもとに出入りしはじめ、『東京朝日新聞』に設けられた「文芸欄」を担当、相馬御風らと自然主義について論争を展開する。さらに四四年には小宮豊隆・安倍能成・森田草平と『影と声』を春陽堂より刊行するなど、華々しく文壇に登場してきた時期であった。そうした関係から、次郎のもとには新刊書や雑誌が数多く集まるようになり、それらを次郎は兄弟たちへ送っていたのである。

この慣行はその後も続き、また送り先も勝也だけでなく、兄弟・姉妹全般へと及んでいた。そのため当然のことながら、次郎は相手によって送るべき刊行物の選別を行っている。[108] 手間と時間の掛かる作業であり、次郎の家族に対する並々ならぬ愛情を感じ取ることができるだろう。

しかしこのことは逆からいえば、勝也は、次郎の取捨を経た出版物を読み続けたということでもある。例えば、シラーとの出会いのきっかけは、思いがけなく送られてきた『帝国文学』のシルレル紀念号であったと勝也はしているが、[109] 同誌は次郎兄が委員として編集に携わった雑誌である。もちろん読書の範囲が次郎経由のものにとどまるということなどあり得ない。だが、勝也は、送られてくる本や雑誌を通じて次郎兄の圧倒的な影響を受け続け、いうなれば次郎という傘のもとに自己を形成していくことになる。前に掲げた読書の記録が、哲学などでなく文学を中心とするものとなっているのも、創作と文芸・演劇評論を軸に文壇において活動をしていたこの頃の次郎の位置と無関係ではないだろう。



明治43年度共同会役員。勝也は最上段右端（『共同会雑誌』35、明治43年７月）。

兄が弟を制御しようなどと意図したわけではないし、勝也とて、兄・次郎へと感謝こそすれ、怨んだ様子など微塵もない。それどころかむしろこれまで一緒に暮らしたことのない、そしてなおも遠くの世界にいる次郎兄への憬れを一層強めていくことになる。あたかもかつて雲外の世界にいた母と生活を共にすることによって行き場を失い、しかし学校のなかには発見することのできなかった新たな憧憬の対象を、そこへ見出したかのように。だがそれ故にこそ、すなわちすべての兄弟のうちでおそらく次郎の感化をもっとも重く受けた勝也においてこそ、そこからの離脱ということが、どこかの時点で課題となっていくだろう。

＊

四年生になった年、勝也は『共同会雑誌』の編輯部委員へと選ばれた。編輯部は、弁論部・運動部とともに共同会の役員を構成するものであり、[10] 学業優秀な学生のみが選挙によって就任するものであった。四年で勇組の副長、[11] 五年で特待生[12]となった勝也は、その資格を十分に有していたことになる。

この間、編集業務の一環ともいうべきもの以外に目立っ

た文章を載せてこなかった勝也だが、担当した最後の号へ、これまでと比べるとやや長い文章を二つ載せた。「初秋の野より」と、「文章上達の必要を論ず」である。[113]

「文章上達の必要を論ず」は、いささか古風な印象を与える題名通りの主張を展開している。その論拠は、剣の時代は終わり筆の時代が到来したという時代認識にある。「戦雲已に去つて文化到り、人は剣を捨てゝ実業に帰る」。「剣は怒って人を殺す、而してその時代は已に去れり。然るに文筆は笑つて人を制す。今やその時代なり。故に能文の士は現代の勇者にして時代の要求する人物なり」。

文と剣という一般的な対比は、勝也の周囲を見渡せば、文章によって生活をはじめた次郎兄と、この頃ちょうど陸士に通っていた三也兄との対比――そしてこの二人は、かつてもっとも仲がよく、しかし九重をめぐって不仲となり、和解に至るのは大正七年・八年頃のことである[114]――とまさに重なる。そのうち勝也は前者をとるべきことを、すなわち文の時代、次郎兄の道へ従うことを力強く宣言したものと解することもできる。

もっともその後、三年を待たずして最初の世界大戦が勃発することを知るわれわれには、勝也の同時代認識の不正確さを嗤うことは容易い。あるいは同じ年に書かれた石川啄木の「時代閉塞の現状」との差異を云々することもできよう。だがかれのこの文章からすると、おそらくそうした同時代の捉え方如何にかかわらず、文の優越を全面的に信頼していたとすべきである。

諸葛亮・孔明を論じて言う。「孔明の忠烈は出師の表に由りて始めて永生を得、出師の表は文章の力に由りて始めて永久に声あるを得たり」。「文章をよくする人は時代を超越して永久に活くる者なり」。孔明の名を不朽のものにしたのも文章であり、文章だけがすべてのものに、時代を超えた永遠の生命を吹き込むことができる。そうだとすれば、当然のことながら、剣も筆によってはじめて永久なる生命を保持することになる。「文章は経国の大業にして不朽の盛時なり」という『典論』の問題構成に従いながら、経国ではなく不朽性を軸に文章の偉大さを説

く。時代の潮流などと関係なく、あるいはそうした潮流などを超え、文の力は卓越しているのだ。

周囲からの批判とそれによって醸し出される後ろめたさにもかかわらず、已みがたい嗜好として続けられた濫読は、文章の不朽性への絶大にして、いささか古典的な信頼によって、あらためて支え直されていく。しかも剣、そして国家から一定程度分離された自律的な価値を持つものとして。おそらくこの時期の勝也は、文章こそがすべての事業のなかでもっともすぐれたものであると確信していたに違いない。

＊

そうした勝也の手になる創作が「初秋の野より」である。原稿用紙に換算して六枚ほどのこの作品は、安倍能成の「新緑の野より」（『ホトトギス』一四―一一、明治四四年六月）に触発された友人への書簡体という形式を借り、メレシコフスキーの『背教者ジゥリアノ』への感激を綴ったものである。勝也が読んだのは同じ『ホトトギス』の増刊第三冊で島村苓三訳。もちろん次郎兄から送られてきたものである。[115]

新緑の野を愛したかつての私はすでになく、いまや私も秋を、それも夏を通り越してまさに廃滅の境に入らんとする初秋を愛する人となった――そう友人へ告白する。そしてこの衰え行く初秋の自然の力に、ジュリアノの末路を重ねていく。メレシコフスキーのこの作品では「ヘリオス。我を迎へよ」を末期の言葉として瞼を閉じていく背教者ジュリアノ。勝也はこの皇帝へと自らを同一化させ、ギリシアの異教の世界を彷徨し、そして賛美する。「私は一日も早くこのグリークの昔に帰つて、青白い香の煙に包れて居るアフロヂテの女神を拝したい」。そして異教としてのギリシア世界との一体化は、当然のごとく、筆をキリスト教へと向けることとなる。

神に対する生命の愛慕を失つても、猶自己を誇張せんが為めに、内心を偽つて神を賛美する年若き多くのクリスチヤンを見る毎に、私はジュリアノが最後に叫んだ此の言葉を思い出さずには居られません、実に彼等ガリラヤ人の多くは、――未だ衷心より神を拝し得ぬ、淋しい私の心にとつては――眼を閉ぢて光を辿り行

く心霊の盲者です。

「初秋の野より」で展開されているのは、ギリシアという異教の世界の発見と、そこからするキリスト教への懐疑である。「羅馬旧教の伝説」に育てられ、人生をキリスト教の立場から考えてきた勝也の視点は大きく転回し、これまでの立場はもはやそのままでは支持できないものとなっている。それが弟・六郎のいう「異端者」への道を決定づけたことは間違いない。

もちろんギリシア世界との邂逅のみがこうした転回を促したわけではないだろう。「衷心より神を拝し得」なかった勝也が、異教としてのギリシア世界を知ることを通じてそのことを明確に自覚し、懐疑するに至ったというのが、おおよそのところではあるだろう。そしてまたキリスト教を介して、ギリシアを異教の世界と捉えたことは、自らの周囲にある異教的なるもの――それはのちに勝也の研究対象として選ばれていくことになる――の発見へ道を示すこととなるだろう。

たしかに結果だけ見れば、勝也も、和辻のいうように、「ギリシアおよびキリスト教の文化」に哺育されたということになる。しかしギリシア世界とキリスト教をともに文化として、なんらの葛藤もなく同時に受け容れられたこの時期の多くの青年たちと異なり、勝也は、幼少期以来キリスト教の立場から物事を考えてきた上に、メレシコフスキーによる対立的図式によって異教としてのギリシア世界を発見したため、どちらを選ぶかという抜き差しならない、そしてこれまでの人生の立脚点を再考せざるを得ないような体験をともなっていた。しかも問題は異教の発見によって解決されたわけではない。ギリシアの神々が、これまでキリスト教が勝也へと与えてくれたのと同じような意味で拠り処となることはありえないのだから。信仰をめぐる勝也の苦悩はこの後も続いていくことになる。

いわゆる大正教養派を特徴づけるとされることのある「あれもこれも」という態度は、選択肢とされたものを、

同じ次元――大体において文化と名づけられる――のものと見なすことによって成り立つ。言い換えればキリスト教をひとつの文化とすることで、ギリシアの文化と両立させることができるとするのである。ギリシア文化もキリスト教も「学習」によって身につけていく者に特有の態度であるといった言い方もされてきた。

ところが、たとえ洗礼も受けず、教会にも行かなかったとはいえ、キリスト教を信仰としているところへと生まれ、それを唯一の基準と考えてきた勝也にとって、キリスト教をほかのものと同次元にあるひとつの文化として捉えるのは容易なことではなく、それはギリシアの異教と出会うことによってはじめて可能となった。兄である阿部次郎に関しても、おそらくそうした捉え方をどこかで修得したということになるだろう。「あれもこれも」という態度は、だれもが自然に持っていたものではなく、ある者にとっては、どこかで悩み、苦労を重ねて修得しなければならないものであった。そしてそうした態度を修得することではじめていわゆる大正教養派的なる思考が展開されていくとするならば、勝也は異教と出会うことによって、次郎がすでに修得していた態度を身に着け、兄へ、そして教養派なるものへと近づいていったということもできるかもしれない。

ただその前に、もう一度メレシコフスキーの作品に戻ってみよう。すると勝也のような読み方が一般的であるとは言い難いことにあらためて気づかされる。メレシコフスキーは、ベルジャーエフらとともに、むしろキリスト教の再生を計ろうとした人物であると現在ではされているし、そもそも勝也の読んだ『ホトトギス』増刊号に付されたケーベルの「序」（魚住折蘆訳）にも、そうした方向での説明がある。おそらくメレシコフスキーの意図に即するならば、そうした読み方が妥当であるだろうし、例えば、著者に関する知識もより豊富で、さらにはケーベルに心酔し、魚住とも親友であった次郎兄なども、当然そのように読み解いたことだろう。勝也が「初秋の野より」を記すきっかけをつくった安倍能成も、基本的にはそうした方向で同書を読み解いていた。[116]

しかし勝也はそう読まなかった。自らをジュリアノの生涯へと過剰なまでに投影し、そこにキリスト教の再生

ではなく、異教の発見という物語を読み取った。兄から送られ、兄によって選ばれた出版物であっても、そこから勝也が汲み取ることまで規制されるわけではない。勝也は、誤読とすら言われかねないような反応を示すことにより、次郎の傘のもとで少しずつ自らの世界を形作りはじめていた。

このように考えてくると、『背教者ジゥリアノ』の結末は興味深い。ジュリアノの死後、余生を過ごす三名が登場し、会話を交わす。いつしか話題はギリシア世界とキリスト教との争いへと移る。そしてその判断は、昼はジュリアノ伝の覚書を整理し、夜はクレメンスの『ストローマテイス』を読んでいるアムミアヌス・マルケリヌスへと求められる。「あなたは、我々の情熱時代を冷静に判断する歴史家として生れて来たのだ。そして紛乱した哲学をある意味に於て調停する人なのだ！」

メレシコフスキーの原作で最後に登場し、結末を暗示するのは歴史家アムミアヌス・マルケリヌス。勝也に衝撃を与えたジュリアノの生涯を文章に記し、まさにそれを不朽のものとする役回りを与えられた人物である。勝也は、この作品において、異教的なるもののほか、歴史家との邂逅も果たしていた。

四　仙台　高校時代

高校は仙台の第二高等学校に進学した。山形中学校の明治四五年度卒業生八〇名のうち、現役で高等学校の進学した者は九名。二高が八名、一高が一名。[11] 特待生で、卒業時の席次が二番であった勝也にとって、二高というのはごく普通の選択であり、すぐ上の兄・余四男も二高の理科に在学していた。かれを悩ませたのは、どこの高校に進学するかではなく、はじめて余儀なくされる学科の選択だった。

中学での読書を通じて、勝也が文学、そして芸術の世界に強く惹かれたことはすでに見た。しかしかれはそこ

でこのように問う。

果して自分はその世界に進みゆく資格を持つものであらうか。芸術の道は天才にのみ許されるべきものではないであらうか。

天才のみによって構成される世界として芸術の道を捉えてしまえば、それへの階梯を一応はなしているとされた文科という選択も、成績などとは別個の「資格」に照らして適否を判断すべきものとなってくる。文科への進学は、その先の進路を著しく狭めるという現実以外に、それを選ぼうと考慮する者に特有の文学観・芸術観によって、多大な決意を要するものとなるのである。ほかの学科を選ぶのとは異質に重いその決断を、このとき勝也はすることなく、法科へ進んだ。「法科は、自分を最も平凡に生かして呉れる事の出来る道だと考へた」[118]。法科という選択をすることで、決断の先延ばしをはかったということもできるだろう。「文科に行くと神経質で、我儘になるかと」[119]心配した母の意向を汲んだ面もあるかもしれない。

中学を卒業し、入学の準備をしているあいだに明治は終焉を迎えた。大正元年九月十日、勝也は第二高等学校第一部乙類、いわゆる独法に入学する。

＊

高校に入って勝也の嗜好が急に変化するようなことはなく、相変わらず読書の日々は続いたばかりか、熱はひときわ強まっていった。そういった勝也にとって、二高は、おそらくほかの旧制高校と同じく、実に適した環境にあった。

英語の教師には土井晩翠がいた。詩集『天地有情』や「荒城の月」の作詞で知られる詩人であることは説明するまでもなかろう。明治三〇年東大英文卒。かつて憬れた詩人なるものが、勝也の前に立ち現れた。

晩翠以上にかれを刺激したのは、登張竹風である。明治三〇年東大独文卒。数々の逸話を残したこの名物教師

は、高等師範学校を依願退職してしばらく浪人生活を送ったあと、明治四三年より仙台に居を移し、二高でドイツ語を教えていた。ほかでもない、『帝国文学』シルレル紀念号の「シルレルの少年及青年時代」によって勝也の血を沸き立たせたその人である。

かれらによる語学の授業では、専ら文学作品が教科書として扱われた。学課の多くを占めた語学教育における著しい文学への傾斜は、旧制高校の一大特色であり、二高も例外ではない。パウル・ハイゼ、ハウプトマンにトーマス・マン。すでにそうした方向へと歩みはじめていた中学時代に日陰で読んできた書物たちはいまや教科書となり、公認された。読書と学課とが繋がり、最大の関心事が授業でそのまま展開されていく。「高等学校の三年は、是までの生涯を通じて、一番生きる事の喜びを感じた時代であつた」――のちにこう振りかえるほど幸福な時間のはじまりである。[120]

こうして学課にも精を出した勝也は、さらに学友会である尚志会の雑誌部で機関誌『尚志会雑誌』の編輯に関与するようになっていった。中学校時代に『共同会雑誌』へ携わった経験がこの活動に繋がるのだろう。雑誌にはいくつかの文章を載せるようになる。例えば、「高照会詠草　夜ふけのこゝろ」[121]ではこんな歌を詠んでいる。

石膏の冷たき光わが胸の閉ざせる底に軽く滲み入る
大空の青き光にくつろぎて青葉の中に吐息する胸

百号記念には小説「赤い影」を掲載する。[122]原稿用紙に換算して二〇枚ほど、現存する勝也唯一の小説である。主人公の浩一は「厭な〳〵五年の生活から放たれて、久し振りで故郷の春に帰つて来た」。故郷は鳥海山が輝き、最上川がゆるゆると流れている。そう、浩一とは、中学を卒業し山寺へ帰ってきた明治四五年春の勝也。そしてこの推測は、ほかの登場人物たちによって揺らぎないものとなる。危なっかしい足取りの幼児は徳ちゃんであり、彼女が手招きする相手は襄（のぼる）ちゃん。徳子は長姉ますの三女（明治四三年生）、襄は長兄一郎の長男（明治四〇年生）。

「赤い影」は、登場人物のすべてについて明確なモデルが存在し、しかも浩一＝勝也以外はすべて実名で登場する一風変わった小説である。その浩一＝勝也が故郷で思い出すのは、ある姉妹をめぐる淡い恋心の記憶である。

八重さんは彼より五つ年上の奇麗な女であつた。よく遠くの方を眺めて居る女であつた。

浩一が十二歳の頃である。八重さんから「浩さんは誰を一番好き」と涙を溜めて尋ねられる。八重さんは遠くの国に行ってしまうのだった。浩一も涙を飲みながらこういった。「八重さん、八重さん。兄さんのお嫁になつて下さらない」。八重「そんな事をお云ひでない、浩さん」。八重さんも泣いた。八重さんはそれきり帰ってこない。

芳さんは八重さんの妹である。浩一が中学三年の頃、夏休みで祖母の家に帰ってきた。村の小学校の同窓会で浩一は余興に芝居を演じることとなった。演目は山科の子別れ。浩一の役は大石の妻。嫂が婚礼で着た衣装を着け、声色も稽古して当日に望む。お盆ということもあって村の人はみな見物に来る。もちろん芳さんも。舞台における浩一の演技に芳さんは涙を見せる。このときから芳さんの態度は一変したと浩一には感じられた。だが言葉を交わす機会もないまま年月が過ぎた。

そして話は故郷の春へと戻る。ついに昨日、浩一は芳さんに会った。心ではあれほど思っているのに、会ってみればなにもいえない。芳さんはどんなに自分を恨んでいるだろう。浩一は机の上に『返らぬ日』を開ながら、毎日芳さんの通るのを待っている……

＊

「赤い影」の概要説明からモデルの詮索へと話を戻す。浩一＝勝也が思慕している芳さんは斎藤芳。詳しくは後述するが、大正八年には実際に勝也の妻となる。勝也が晩年まで賞賛してやまなかった死別した妻である。その姉の八重さんこと斎藤八重は阿部余四男、すなわち勝也のすぐ上の兄と大正五年に結婚する。すなわちこの作品は、阿部家兄弟と斎藤家姉妹とが結ばれることとなった由来を垣間見せてくれるものであり、右の概要では省い

たが、芳さんに対する思いが内向しているとしか言いようのない場面が何回か現れるなど、むしろ創作の若干交じった勝也による心情告白といった趣の作品ですらある。

そうしたなか、数少ない明確な創作が次の場面である。浩一が故郷の思い出に浸った直後のところであり、そしてこのあと八重が登場する。

彼は幼い時から殆んと祖母一人の手に育てられた。少し遊び過ごして月の出る頃等にトボ〳〵と西裏の方から帰つて来る時、母恋しさに涙ぐむ事も度々あつた。彼の幼心には灰色な祖母一人の心では物足りなかつた。

（中略）自分を捨てゝ遠くの国に行つて居る母や姉さんが恨まれた。

祖母・わかのの手のなか、旧教の伝説のなかで育てられたことは確かだし、女神と仰いだ母・ゆきへの恋しさに涙したこともあったろう。捨てたかどうかはともかくも、母や姉と別居していた時間もあった。だがその後、父母とともに過ごした「遠くの国」山形での五年間があり、そこでの生活をひとまず終え、浩一＝勝也は久し振りで故郷の春に帰ってきたのである。「厭な〳〵五年の生活」とあわせて右のように記すことで、読者にそうした想像の余地を与えず、母の不在は幼少の時から変わらぬかのように、叙述へ細工を施している。

この結構は、小説のなかで浩一が読んでいる鈴木三重吉の『返らぬ日』に借りたものである。そのなかで、浩一と同じ年頃の文学青年である「わたし」はこう書いている。

祖母としては不足のない、しつとりとした祖母だけれども、かうした私の心持の前には、さういふ祖母としてだけでは物足りない。私はもつと何か、祖母に欠けてゐる或物を欲してゐる。かういふ時に母といふものが要るのではないかと思つて見ても、母のないわたしには何がなる。[123]

その物足りないものを、「わたし」は、故あって同居していた従姉・三千代へと知らず知らずに求めていていたことに気付いていく。亡き母の代わりを求めていた自分がいつのまにか恋をしている――そうした三重吉の小説

の筋立てを借りた勝也は、浩一があたかも同様な探求の過程で八重さんと芳さんを見出したように描いている。だが母親なるものへの憧憬をもたらした母の不在は、山形での生活で一度は解消したはずであり、そうした時間を経た上でさらに芳さんを求める勝也の行動は、もはや単に母親への憧憬の延長上のことではあり得まい。そうした点は筋書きの借用によって隠されていく。

このように「赤い影」に対し『返らぬ日』が強く規定しているということは、かえって三重吉と異なる物言いがなされているところに注意を促すことになろう。

三重吉自身と思わしき「わたし」はこう言う。「自分の恋すべき女は…自分と共にナソーの話を読み得る女でなければならない」。ナソーとは古代ローマの詩人・オウィディウスのこと。それを一緒に読めるような高い教養を身に着けた女のみを「わたし」は求める。「自分の女といふのは、何処か自分の見得ぬところにゐなければならぬといふ気がする。容易に得られる女は自分の求むべき女ではないといふ気がする」[124]。

ところが浩一はこれと対照的である。「文明の息をかけて曇らした都会の女の心からは、自分の欲しい透明な涙が湧いて来ない。自分はどうしても草の中から生れた自然の女が欲しい」。「芳さんは自分の欲する涙を与へ得る女である」。

読書と現実との行き来を繰り返しながら、周囲にいる女性への態度を築いていく点で、浩一と「わたし」とは瓜二つである。だがそこから導き出されてくる態度まで同じわけではない。浩一は、草によって象徴された自然の女なるものを欲し、まさしくそれにあたるものを芳さんのなかに見出す。この幸福なる偶然について、これ以上の言を弄するのは野暮というものだろう。ただ「わたし」は最終的に三千代を捨てることになるのに対し、浩一＝勝也は芳と添い遂げることになったことだけはもう一度記しておこう。

＊

ある意味では実に赤裸々な小説まで発表するようになった高校時代の勝也である。このまま行けばどれだけの実作を残してくれたことか。だがそれはある事件によってかなわなかった。事件は「赤い影」の載った百号記念号が出てすぐに起こった。その号が引き金となったという方が適切かもしれない。

百号の数号前から『尚志会雑誌』は文芸雑誌としての傾向を著しく強め、論説を押しのけ、小説・戯曲・詩・短歌の類が誌面の大部分を占めるようになった[125]。これを主導したのが雑誌部長心得であった登張竹風と、かれを慕って周囲に集まった学生たちである。もちろん勝也もその一人であり、「赤い影」はそうした雰囲気のなかで掲載された。

だが文芸化の進展に対しては校内でも批判が伏流していた。登張部長心得の言葉を借りよう。「僕の文学熱がいけないと云うのである。二高の雄大剛健ぶりが現はれてゐないと云うのである。凡てが軟風吹き渡るの観があると云うのである。尚志の看板に対しても黙許は出来ないと云うのである」[126]。学友会の機関誌が文芸同人誌のような軟弱なるものであってよいのか、二高の校風はどうなってしまうのか――こうした主張を掲げた学生たち、例えば、のちに二高の校長を務めた野口明や、内務官僚から厚生大臣となった相川勝六らが一致して運動を展開し、三好愛吉校長に進言を行った。その結果、登張は部長心得を退任、委員も全員が退いた。新生雑誌部は「硬派」によって占められ、同時に勝也の「軟文」が載る機会も消えた[127]。

同様の構図による闘ぎあいは、早くは一高において見られる。明治三八年に魚住折蘆が『校友会雑誌』に発表した論説「個人主義の見地に立ちて方今の校風問題を解釈し進んで皆寄宿舎制度の廃止に論及す」[128]が挑発する恰好となり、反対派とのあいだで議論が沸騰した。前年に一高を卒業し、東京帝国大学に通っていた阿部次郎も、魚住を擁護する立場で討論会に参加している[129]。また二高でも、その後の『尚志会雑誌』を瞥見する限りでは、新

生雑誌部のもとで不動の方針が築かれたとまではいえず、この後も揺り戻しが起きたりしている。

こうしたことは、いわゆる教養派の孵卵器のように見られがちな旧制高校においてすら、かれらのような存在は必ずしも多数でも正統でもなかったことを意味しよう。同じ校舎のなかには、かれらのことを胡散臭い存在と見なす勢力が常にあり、かれらはそうしたものと暗暗裡に対抗しつつ、読書に励み、芸術の世界に舞い、文章をものしていたのである。もちろん勝也らも今回の事件ぐらいで「硬派」の軍門に降ったりはしない。一〇一号に載せられた旧編集委員連名による「雑誌部を退くにあたつて一言す」にはこんな言葉がある。「デオゲネスの嘲笑のやうに笑はれるのは我々でなく嘲笑し得たと思つて居た人達にある」。

むしろこの一件を通じ、勝也には、寮で隣室だった相川勝六らほかの法科生と比べ、自らが随分と遠いところへ来てしまっていたことに気付いたことの方が、よほど重大事だったに違いない。自分をもっとも平凡に生かしてくれるはずだった法科で、そもそも自分は生きていくことができるのだろうか。勝也はそうした疑問を、もはや抑えられなくなっていた。

*

『三太郎の日記』が勝也の手許に届いたのは同じ年の春のことだった。これによって次郎そして三太郎を導師と仰ぐに至ったことは、前号の冒頭に記した。このほか高校時代の読書の記録を自身の回顧から拾っておこう。[13]

『白樺』では、武者小路実篤という次郎兄とはまったく異なる個性に強く惹かれるとともに、口絵などによってロダンや印象派に触れ、美術の世界への眼を開かれた。ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ゴーガンなどを好んだという。一方、流行に追われてオイケン、ベルグソン、ニーチェなどの哲学書を次々と漁ってもいる。だが本人によれば、次郎兄のほか導きの師としたのは、トルストイとドストエフスキーだった。

この両者、とりわけドストエフスキーへの関心は、これまた『背教者ジゥリアノ』のメレシコフスキー経由の

ものだった。かれには『トルストイとドストエフスキー』の著書があり、次郎兄とは『影と声』で共著者でもあった森田草平と安部能成によって翻訳されている。[131] 勝也が目を通したのはこの訳書だろう。なおこの時期におけるメレシコフスキーの影響力は、日本に限定されたものではなく、例えば、勝也が教科書としても親しんだトーマス・マンも、メレシコフスキーの読解を介してロシア文学を受容し、作品へと活かしている。[132] 勝也はある意味において西洋文学の最先端を同時代的に体験していたことにもなる。だが一方でメレシコフスキーを経たことで、トルストイとドストエフスキーについても、キリスト教と異教という『背教者ジゥリアノ』に衝撃を受けたときと同様の問題系のなかで読んでいったようである。

人間の魂は神に繋がつて居る。芸術の世界は宗教に繋がつて居る。……自分の魂に答へて呉れる神の姿こそは、自分に取つて真実な神の姿である事を知つたのである。……トルストイやドストエフスキーがさうであつたと同じ意味に於て、自分も矢張りキリストの弟子である事を拒む事は出来なかつたやうである。[133]

ジュリアノと出会い、異教へと彷徨った勝也であったが、キリスト教から完全に離れることにはならず、トルストイとドストエフスキーによって神との繋がりを回復した。だがその神は、もはや昔日のものとは大きく異なっていた。どこかに教会との繋がりを残していた神に代わり、新たにかれの魂と繋がった神は、自分の魂に答えてくれる限りでの神とされた。ある意味でこの上なく自己中心的なこうした神は、少なくともいわゆる正統的な神とは大きく異なる。それにもかかわらず勝也があえて自らを「キリストの弟子」であるというのは、勝也のこれまでの閲歴によるとしかいいようがない。トルストイやドストエフスキーがまさにそうであつたとのと同じように。いずれにしろ勝也の神におけるキリスト教の色合いはかつてないほどに薄まっている。

勝也は、こうした信仰にまつわる悩みなどについて、導師であった次郎兄へと手紙で打ち明け、指針を求めていたらしい。その様子は、この年の夏に次郎から勝也に宛てて書かれた書翰などから、少しだけ窺うことができ

る。[134]

兄は手厳しい。弟が言ってきた神観について「疎漏」「未熟」と断じ、弟子が殉教への憧憬を言ってくれば、センチメンタルな感激に過ぎないと否定する。そして道徳の権威を否認し、自分のための生なるものを説いてきた勝也に対し、こう説法している。「君の生の内容には物質的功利的快楽論的の臭が多い。そしてこの臭が法学生の人生観らしいいや味を予言してゐる。生の内容をもつと哲学的に深く考へて見たまへ」。次郎はさらに述べる。「自分の思想の中にもつと「否定」と「懐疑」との影を認めること――之が今の思想界一般に共通の必要で、又君の最も必要とする処だ」。

次郎の言うことは間違っていないかもしれない。しかしそれを認めざるを得ないからこそ、勝也からすれば、兄の像は息苦しいほどに肥大化し、その兄は哲学によって法学生の自分へと臨み、そして否定してくる。次郎の正しさは周囲の人を傷つけずにはやまないたちのものだったという次郎の娘・大平千枝子の述懐は、父・次郎と母・恒子との関係についてのものだが、[135]おそらくほかの家族とのあいだでも、同様のところはあったろう。

だが勝也はそれに単純に反抗したわけではない。「兄の家で眼に著くものは独乙語の本であつた。二階の兄の書斎は、ギツシリとこの独乙語の本に依つて充たされて居る。……兄の本は、自分を幸福にすると共にまた圧倒して来たのである」。[136]兄の傘のもと、気ままに読書へ勤しんできた勝也の軌跡は、多少のぶれはありながらも、段々と兄へと近づいて行く線を描いてきた。だがそこへ近づけば近づくほど、その存在は大きなものと感じられ、勝也は兄の、そして哲学の重苦しさに耐えがたくなっていく。

そうしたなか出会ったのがラビンドラナート・タゴールである。ときあたかもブームの巻き起こっていたこのインドの詩人[137]から、勝也は自分にとって親しいもの、懐かしいものを感じとっていた。

タゴールは、寧しろ自分の幼き哲学が尚現に自分に生きて居る事を自覚せしめ、しかもその哲学は、東洋的

ともいはれる性格を持つものであつて、必ずしも自分一個の夢ではなかつた事を知らしめて呉れた哲人であつた。[138]

それはもう単なる異教ではなかった。異教の発見と神の再発見とを経て、良くも悪くも柔軟な考え方へと辿り着いていた勝也にとって、それはひとつの立派な哲学にほかならなかった。次郎兄のいうものとそれがいかに異なっていようとも。そしてこのことは、それと響きあうものがあると勝也には思われた幼き時代の哲学への関心をも呼び覚ますこととなる。こうして勝也は異教、ドストエフスキー、そしてタゴールなどを経つつ、自らの足下へと徐々に視線を送るようになってきたのであった。

（以下、次号）

注　番号は（上）から引き継ぎ、書誌等も前号にて注記したものは再び詳記することはしていない。

(87)　山形県教育委員会編・刊『山形県教育史』通史編・上、一九九一年、五八五～六〇五頁。

(88)　『山形県教育史資料・統計篇』六、二三四～五頁。

(89)　詳しくは新関岳雄『光と影』五七～七一頁など。

(90)　山形県立山形東高等学校校史編纂委員会『山形東高等学校百年史』山形県立山形東高等学校、一九八七年、五八頁。

(91)　阿部余四男「三太郎先生」、『根芹』七七頁。

(92)　阿部余四男「幼少時代の竹岡」、『古代文化』一〇、一九五八年、一一二頁。この年の山形中学校の出願者数は二七八人、入学者数は一三三人。注（88）に同じ。

(93)　個々の事件については、『山形東高等学校百年史』、長岡安太郎『明治期中学教育史―山形中学校を中心に』大明堂、一九九一年などを見よ。

(94)　山形県立山形東高等学校校史編纂委員会編『山形東高等学校校史編纂資料』山形県立山形東高等学校、一九七四年などを参照。

(95)　竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』一四八頁。

(96) 養徳園における富太郎については、山形県立朝日学園編・刊『七〇年のあゆみ—創設期をたずねて』一九八二年、第二章を参照。
(97) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』一四九頁。
(98) 隆文館、一九〇九年。
(99) 阿部余四男「幼少時代の竹岡」、『古代文化』一〇、一一二頁。
(100) 『共同会雑誌』二九、明治四〇年七月、五〇頁。『共同会雑誌』は山形県立山形東高等学校栂野文庫蔵。
(101) 阿部余四男「牧童」への評中の言葉。『共同会雑誌』二九、五一頁。
(102) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』一四五頁。
(103) 「竹岡先生略譜」、『史淵』三六・三七、一九四七年、一六九頁。「文責在記者」とあるが、竹岡の教え子である西尾陽太郎の執筆と推測される。
(104) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』による。
(105) 佐久間惣治郎（一八七七～一九五六）。「口を開けば心身修養を唱ふる」と自ら称する人物であり、山形中学校では自彊会という名の修養団体を設けるなどの実践活動も行っていた。佐久間は山形を去ったのち、昭和九年に千葉女子商業学校を創設、現在の千葉経済学園の基礎を築いた。以下の文献などによる。佐久間惣治郎「心身の修養」、『共同会雑誌』三七、明治四四年十二月。宇留野勝弥『あゝ佐久間先生』私家版、一九七三年。景徳記念事業会編・刊『佐久間惣治郎先生追想録』一九五九年。
(106) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』一五三頁。
(107) 『山形東高等学校百年史』九二頁。
(108) 次郎の日記には、「午前雑誌を方々へ送る包装をしているところ」（大正八年三月四日、『阿部次郎全集』一四・二七二頁）といった記述が時より現れる。また大正八年五月二三日付で長姉ますが阿部家一同へ送った手紙のなかで、ますは次郎に宛て「毎度ざっしありがとう御座います」と記している。『地上の故郷から天の故郷へ—釜田彰介と徳子』八八頁。
(109) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』一四六頁。シルレル紀念号は明治三八年八月刊行。
(110) 『山形東高等学校百年史』一九～二一頁などのほか、『共同会雑誌』各号によった。
(111) 「本年度各組々長」、『共同会雑誌』三五、明治四三年七月、九一頁。

(112) 「第二十八学年特待生」、『共同会雑誌』三七、明治四四年一二月、一三三頁。
(113) 『共同会雑誌』三七、明治四四年一二月所収。
(114) 簡単には前号、一四～五頁。詳しくは新関岳雄『光と影』七二～九二頁。
(115) 明治四三年一一月の刊行。以下、引用以外では、メレシコフスキー、ジュリアノと表記する。なお、島村苓三は英文学者・島村盛助のこと。
(116) 安倍能成「背教者ジウリアノを読む」、阿部次郎・小宮豊隆・安倍能成・森田米松『影と声』春陽堂、明治四四年三月所収。
(117) 「四十五年度卒業生官立学校入学本会外員氏名」、『共同会雑誌』三九、大正二年三月。
(118) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』一五〇～一頁。
(119) 阿部六郎日記・大正八年八月六日、『阿部六郎全集』三、一穂社、一九八八年、一三頁。これは末弟六郎への言葉で、勝也が文科大学卒業後の話であるが、主として次郎を念頭に言われたことと推測される。よって勝也に類似のことを言った可能性がないとはいえない。
(120) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』一五二頁。
(121) 『尚志会雑誌』九八、大正二年一二月所収。同誌は東北大学史料館蔵。
(122) 『尚志会雑誌』一〇〇、大正三年六月所収。
(123) 鈴木三重吉『返らぬ日』春陽堂、大正元年三月、五一～二頁。浩一は最新刊を読んでいることになる。次郎兄が送ってくれたものだろう。
(124) 同右、五九頁。
(125) 高木健次郎「雑誌部史」、第二高等学校史編集委員会編『第二高等学校史』第二高等学校同窓会、一九七九年、七八八～七九〇頁。
(126) 登張竹風「ドイツ語懺悔」、『登張竹風遺稿追想集』郁文堂出版、一九六五年、一五三頁。
(127) 「就任の辞」、三好愛吉「尚志会雑誌に対する希望」、いずれも『尚志会雑誌』一〇一、大正三年一二月所収などによる。
(128) 『校友会雑誌』一五〇、明治三八年一〇月。
(129) 要旨は『校友会雑誌』一五二、明治三八年一二月で知ることができる。この時期の阿部次郎の論説は、『阿部次郎全集』一二を

見よ。

(130) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』による。引用は一七一頁。

(131) 『人及芸術家としてのトルストイ並びにドストイエフスキー』玄黄社、大正三年二月。訳者の一人である森田草平によるメレシコフスキー経由のドストエフスキー受容については、豊田敦子「森田草平とメレジコフスキー」、『学苑』六八五、一九九七年などがある。

(132) 小黒康正『黙示録を夢みるとき―トーマス・マンとアレゴリー』鳥影社、二〇〇一年、一六四～一七〇頁。森田・安部の共訳書もドイツ語からの重訳である。

(133) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』一七一～二頁。

(134) 大正三年七月一〇日付阿部勝也宛阿部次郎書翰、『阿部次郎全集』一六、五二八～五三一頁。未投函書翰の部に収録されている。

(135) 大平千枝子『父　阿部次郎』、同『阿部次郎とその家族―愛はかなしみを超えて』東北大学出版会、二〇〇四年などを参照。

(136) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』一七八～九頁。

(137) 吉田絃二郎『タゴールの哲学と文芸』大同館書店、大正四年などの解説書や翻訳が次々となされ、大正五年の来日へと続いていく。

(138) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』による。引用は一七五頁。